

天の真名井

ホツマツタエ文献を勉強して行く内に、トヨケやアマテルが神上がりされたと云う「天の真名井」の地名にぶつかる。その場所はどこだろうかと、思いを巡らせながらホツマツタエ文献を読んで行く。すると「真名井の原 宮津仕ゑ」と記載している。「宮津」、宮津は地理の知識より、京都府の丹後半島付け根部の「宮津市」であることが容易にわかってくる。

その「天の真名井」や「宮津」の地名の個所について、ホツマツタエ文献より抜粋すると次の様な文章になる。

1-16~17文

..... 告ぐる伊雑の  
大御神 天の真名井に  
御幸あと .....

6-15文

..... ハヤキジ飛べは  
天日神 急ぎ真名井に  
御幸なる .....

6-19~20文

..... 真名井の原の  
宮津仕ゑ .....

7-19~20文

ソサノオは これ整ひて  
真名井なる 神に詣でる

7-53文

昔 君 真名井にありて

19-B5文

..... 三壺真名井に  
乗り御幸

24-21文

..... 真名井に至り  
又サお納め

28-35文

..... サルタに穴お  
掘らしむる 真名井に契る  
朝日宮 同じ所と  
宣えば

28-49 文

・・・・・・ 御幸の神輿  
真名井にて アマテル神は  
内つ宮と トヨケは外宮

と記載している。

### 玉杵の 宮津の宮

ホツマツタエ文献に登場した「宮津」市は、地形的に宮津湾を中心に丹後半島の南部～天橋立～宮津駅～東の舞鶴市までが平仮名の「くの字」をしている。特に天橋立の海中公園散歩道は、この世とは思えない「遠くの山並み・宮津の海・松並木」がマッチングした風光明媚な町である。

この素敵な宮津の町に、「トヨケ神こと玉杵」が日高見国(今の茨城～宮城地方)より「なぜに」移動して来たのか。その訳を知りたくホツマツタエ文献を読んで行くと、「6-13 文」にそのことが記載されている。

ホツマツタエの直訳文は

6-12

千足国	益人コクミ
怠れは	玉杵告げて
日高見は	八十杵に治す
高杵お	君の助けと

6-13

玉杵は	行きて細矛の
国お治す	宮津の宮ぞ

(訳文)

千足国(山陰地方)の益人(役人)のコクミ氏が、地方の長官の仕事を怠っているとの連絡が、日高見の「タマキネ・玉杵」の元に入ってきた。既にイサナギ、イザナギが国中を平安な国に作り替えたところに、「不穏な気配」が発生していた。このことを察した玉杵は急遽日高見の国を、子供の「ヤソキネ・八十杵」に治めさせ、急ぎ八十杵の子供の「タカキネ・高杵」を伴って、自ら「アマテル神」の助けとして細矛国(島根・丹後地方)の宮津に入り細矛国を治めた。この玉杵が治めた、細矛国の宮を「宮津の宮」と云う。

### 真名井の原の 場所探し

ホツマツタエ文献に記載の「天の真名井」が、「宮津」市にあることがわかってきた。そのため「広域地図」より「真名井」の地名を捜して見た。だが不思議なことに、どこを捜しても真名井の地名が見つからない。また京都府の地図を広げて見たが、同じであった。そこで最新の電子地図帳を購入して細かく調べたが、それでも「真名井の地名」を見つけることができなかった。

一方ホツマツタエ文献には、「宮津の宮」に入り、「御世も豊かに 治まりて八万年へて」と記載している。またその後「玉杵ことトヨケ神」は、「22 鈴 505 枝初」に「真名井」の「洞」に隠れ「朝日神」になられたと記載されている。トヨケ神が神上がりした年は、紀元前 1,269 年のことになる。その時「ウオヒルギことワカヒトことアマテル」は、27 年歳の青年「ワカヒト」であった。そのことをホツマツタエ文献(直訳文)では、

### 6-14 文

．．．．． 御世も豊かに  
治まりて 八万年へて  
二十二鈴 五百五枝初に

### 6-15 文

宮津より ハヤキジ飛べは  
天日神 急ぎ真名井に  
御幸なる ．．．．．

### 6-17 文

．．．．． 洞お閉ざして  
隠れます その上に立つ  
朝日神 ．．．．．

## スズはマサカキ

スス暦の基となる「スス」は、何を意味するのか。ホツマツタエを勉強しても解けないことの「一つ」である。スス暦として使用はしているが、本来の意味は何か。．．．．ホツマツタエ文献を読みながら日頃より考えていた。ある日、たまたま次の一節にぶかった。「スズはマサカキ」である。この場面は、タクハタチチ姫（のちの箱根神となるオシホミの皇后）が自分の諱が、「スズカ・鈴明」であることに気が付いた。そしてタクハタチチ姫は、ワカヒコ（若彦ことアマノコヤネのちのカスガ神）に「その意味」を尋ねた時の記載である。そのワカヒコの答えの一節は、「スズはマサカキ」であった。そのことについて私は、ススの意味が「80%」解読できたと直感した。

ホツマツタエ文献 13-26～28 文、  
(訳文)

タクハタチチ姫は、ワカヒコに『私はイサナミの君より「スズカ」の諱を賜ったが、訳を知らない、教えて欲しい』と尋ねた。これに対しワカヒコは、「スズはマサカキ 穂末伸び トシに寸中の ムヨロ穂木 欲しみをされば 鈴明なり 宝欲しきは スズ消ゆる」と答えた。

前文で「ワカヒコ」が答えた「スズはマサカキ」。この一節を見て「スス暦」を「マサカキ暦」と訳する研究者もいるが、「マサカキ」の本来の意味を理解してないことに尽きる様だ。「マサカキ」も「サカキ」も意味は同じである。辞書によると「サカキ」は「常葉の木」「常緑高木、葉は長円形で濃い緑色」と書いてあり、落葉樹でなく「常葉樹類」を意味する様だ。また「スズ」は28-57 文にて若き「タケヒト」が諸神に向かって、「スス苗ありや」と問う記載がある。そうすると「スス苗」は「スス竹」のことと思える。この「スス竹」の見解について長年、浅間ヒラク氏は「スス竹」であるとの見解を述べられている。

## 元伊勢一宮 籠神社

宮津の神社では、「元伊勢一宮 籠神社」が有名である。また現在の知識・検索の最先端と云えば「インターネットのホームページ」であろうか。早速、「籠神社」のホームページにお世話になってしまった。すると、「神社の由緒・由来」の一部に「奥宮 真名井原に豊受大神をお祭りし」との記事を目にした。また神社の地図には、「籠神社」の近くに「真名井神社」も案内されていた。あれだけ捜し続け「電子地図」等にも未記載であった「真名井神社」がやっと見つかったことに安堵した。(のちに電子地図を詳細に見ると、籠神社や真名井神社は神聖な地であろうか、その部分が正方形に空白になっていた。)それでは、「元伊勢一宮 籠神社」のホームページより「神社の由緒・由来」の一部を抜粋しましたので、ご覧下さい。

## 『元伊勢一宮 籠神社の由緒・由来』

・伊勢神宮の神々がこの地からうつられたという、伊勢神宮のふるさと  
・神代と呼ばれる遠くはるかな昔から奥宮真名井原に豊受大神をお祭りしてきましたが、その御縁故によって人皇十代崇神天皇の御代に天照大神が大和 国笠縫邑からおうつりになって、之を吉佐宮（よさのみや）と申して、豊受 大神と御一緒にお祭りされました。その後天照大神は十一代崇神天皇の御代に、又豊受大神は二十一代雄略天皇の御代にそれぞれ伊勢にお遷りになりました。それに依って当社（籠神社）は元伊勢と云われております。両大神が伊勢に お遷りの後、天孫彦火明命を主際神とし、社名を籠宮（こ のみや）と改め、元伊勢の社として、又丹後国の一之宮として朝野の崇敬を 集めて来ました。

## 真名井の原で見る スズはマサカキ

ある年の小春日和を選んで、「真名井神社」を訪問することができた。細長～い天の橋立を約1時間ほど散歩し、籠神社に辿り着く。99%の観光客は、籠神社にお参りした後は、高台の「傘松公園」又は「股のぞき公園」に行くのが一般コースであるが、私は「真名井神社」と急いだ。それで「ここから真名井神社への道順を、観光レポート風に案内して見たい」と思う。読んで下さい。

真名井神社に行く道順は、籠宮神社の拝殿横より右に抜ける。その後境内を山側に少し歩いて行くと「左方向」の案内が出る。次の田んぼと民家に挟まれた細い道を暫く歩いて行く。すると左側に神明形の鳥居が見える。鳥居をくぐると山側に坂道が続く。鳥居より約7～8分くらい歩いたところで、境内入り口の左側に「真名井神社」と刻まれた石碑が見えてくる。石碑の数は、左側に2カ所、右側に1カ所の3ヶ所である。石碑の文字を読んで見ると、境内入り口の

### ①左側の石碑

表 真名井神社

裏 神代以来ノ霊地 丹波國与佐之小見比沼之真井原

### ②また左手前の別の石碑がある。

ここにも真名井神社の云われが刻まれている。

表 真名井神社

豊受大神元津宮ナリ

古名 匏（ひさご）宮 吉佐宮 与謝宮

一云 天吉葛宮

一云 比沼真名井

一云 久志浜宮

一云 元伊勢大元宮

### ③また境内入り口の右側にも石碑がある。

表 匏宮大神宮

裏 一名 豊受大神宮

一名 古杜大明神

一名 真名井奥宮

小さな字で、一名 久志日野真名井原の宮

と刻まれている。だが私個人としての調査が終わってないため、記載のみにしたが、「一名 真名井奥宮」の文字に興味を引かれた。石碑を通り抜けて、真名井神社の境内に入る。暫く歩いて行くと階段になっている。階段を登り切ると正面に、数寄屋作りの「真名井神社・拝殿」が現れる。神社に静かにお参りする。ふと左手側を見たところで、目の前の境内の外に「何と」なんと「孟宗竹の森」が見られた。

その「孟宗竹の森」からインスピレーション的に「ススは、竹」のことでは、と連想したのは早合点だろうか。神社の裏手は、疎らな杉の林になっている。杉の林より地形を推測すると小高い丘陵になっている。その手前に神明鳥居がある。その右隣に「←(上矢印)真名井原神体山」の石碑が見られる。だが神体山の頂きが、杉林で見えない。この神体山がホツマツタエ文献と関係が深いのかと、思いながら帰途についた。

話題は前後するが真名井神社に行く左側の藪は、孟宗竹が群生する森の連なりであったことを帰り道に知ることになった。そして私は、真名井神社を後にしながらホツマツタエ文献の28-3文の一節を思い出した。

直訳文

28-3文

元を問ふ 翁答えて

このススは 天土開く

常立の 宮のマサカキ

天枝千枝に 折鈴となる

そして、ここがホツマツタエ文献に記載の「天の真名井」か「真名井の原」であろうか。それならば「スズはマサカキ」の意味は、「孟宗竹」「スス竹」のであろうか。

### 「三百六十五枝」→「三百六十五(日)重」への新見解

本小冊子・第5号にて、「天の巡りの 三六十五枝」の「枝」を考えた。その時の文を引用すると、『ホツマツタエ原文には、太陽暦の一年間の日数 365 日に対して一年間の日数のことではなかろうかと思われる「365 枝」の言葉がある。その原文訳は、次の通りである。

1-34

この教糸 天の巡りの

三六十五枝 四つ三つ分けて

三十一なり 月は遅れて

三十足らず まこと三十一ぞ

「天の巡りの 三百六十五枝」・・・だがこの文節の本来の意味がわからない』と第5号で説明してきた。たがこの「枝」の基を一音節で考えると「エ」である。「エ」を漢字表記で説明すると、「枝・重・恵・江・絵・得」などがあげられる。この「枝・重・恵・江・絵・得」より「三百六十五枝」を「三百六十五重」と考えたらどうなるだろうか・・・。すると意味は「365 日の重なり」に考えられ、「日」が省略された文節になってないだろうかと思った。この様に新たな解釈すると「天の巡りの 三百六十五(日)重」と考えられ、「三六十五重 四つ三つ分けて 三十一なり」の説明が無理なくできる様だ。そこでホツマツタエ文献の記載文の通りに計算すると、 $365 \text{ 日重} \div 4 = 91.25 \text{ 日重}$ 。 $91.25 \text{ 日重} \div 3 = 30.417 \text{ 日重}$ になる。

式

$365 \text{ 日重} \div 4 = 91.25 \text{ 日重} \cdots \cdots \text{四つ}$

$91.25 \text{ 日重} \div 3 = 30.417 \text{ 日重} \cdots \cdots \text{三つ分けて、三十一なり}$

この様に考えてくると、あたかも「太陽暦の一年間日数を1ヶ月間の日数に計算する時」の説明式に一致してくる。

すると「天の巡りの 三六十五(日)重 四つ三つ分けて 三十一なり」の文章は、「1年の月数、12ヶ月の成り立ち初め」を暗示している様だ。

以上